

新十津川における女性のくらし

—結婚や出産に関わる習俗の変化についての一考察—

尾曲香織

Key Words 移住 (Immigration)、家 (Ie)、結婚 (Marriage)、習俗の変化 (Change in Custom)

1 はじめに

本稿は、北海道博物館で継続中の研究課題「戦前・戦中・戦後における道民生活の変遷に関する聞き書き調査」に基づいて得られた調査結果の一部を報告するものである。

北海道は主として明治期以降に本州以南からの移住が進んだ。その際、一つの地域に複数の地方の出身者が定着することも珍しくなかった。そのような中で結婚については、母村から妻となる女性を呼び寄せたという事例も聞かれるが、母村が異なっても定住した地域内で相手を選定したという事例も多数ある。結婚は、家同士のつきあいが生じる点で、当事者だけの問題ではない。また、家のつきあいのあり方は、母村の社会構造などによってある程度決まっている。そのため、他地域出身者同士の結婚では、そのつきあいのあり方が問題になったと推測される。筆者は、このような問題を人々がどのように解決し、また母村から持ち込まれた様々な習俗がどのように継承、あるいは中断されてきたかを明らかにすることを目指している。それにより、現在の北海道での生活の成り立ちの経緯も明らかにできると考えるためである。

結婚するにあたっては、まず、相手を選定する必要がある。通婚圏の変化については、宮良高弘が空知地方の妹背牛町で昭和元（1925）年～20（1945）年に移住先周辺での結婚が増えたことを明らかにしている（宮良1998：105）。しかし、他の地域にも同様の傾向があるのか、どのような経緯で結婚に至る傾向があったのか判断し難い。本稿ではこの点を報告するとともに、それに影響を与えたと考えられる当時のくらしぶりにも着目し考察を行う。

今回調査対象とした北海道樺戸郡新十津川町（以下、新十津川と表記）は、町名から察せられるように、現在の奈良県十津川村とのつながりが深い。町の誕生の契機が、かつての奈良県吉野郡十津川郷からの団体移住で

あったためである。団体移住の経緯は小林宏吉編『新十津川町史』（1966、以下『町史』と表記）に詳しいが、簡潔に記すと、以下の通りである。

明治22（1889）年8月の暴風・豪雨の影響による地滑り・山崩れによって、十津川郷の村々は甚大な被害を受けた。罹災者の生活を立て直すにあたり、当時対外貿易の観点から奨励されていた海外への移住のほか、本州各地あるいは北海道への移住などの案が出された。十津川郷出身の前田正之ら東京在住者の働きかけにより、当時の北海道庁長官永山武四郎が、十津川郷からの移住者にできる限りの便宜を図ることを約束したため、北海道への移住が進められることとなった。移住者は600戸2,489人にも及び、同年10月18日以降3回に分けて北海道へと向かった。同月28日最初の移住者が小樽港に到着し、その後滝川へ移動。滝川では、当時屯田兵用に建築されていた兵屋を借り、1棟に4世帯が同居するという環境の中で、8ヶ月滞在した。そして翌年6月に石狩川を渡り、新十津川への入植が開始された。明治23（1890）年1月15日に新十津川村が設置され、昭和32（1957）年には町制が施行されて現在に至る。

十津川郷の人々によって開かれた新十津川には、その後北陸地方や四国地方などから多くの人々が移住した。『町史』には新十津川でくらす人々の習俗についても記述されているが、十津川から持ち込まれたとされる事例が中心である。平田角平編の『新十津川の食 ぐった煮はいかが 昭和初期にみる』（1986）でもこの点が指摘されている。同書では食を対象としたアンケート及び聞き取り調査の結果が記されている。この調査にあたって、各県出身者の移動が安定したことや昭和30（1955）年以降に食生活が大きく変化したこと、それ以前には各県の伝統的な食生活ともいべきものがまだ残されていたことなどを理由として、対象の時期を昭和初期に設定している（平田1986：7-8）。同書には、特に女性への聞き取りの際の実感として「実家の両親、婚家の両親など



【図】新十津川町の位置

の出身県の伝承が、そのままのもの、あるいは混在したものの、さらに融合・同化されたりしている」とあり、昭和60（1985）年頃にはどこの習俗かを単純に示すことは難しい状況であったことがうかがえる。

上記も踏まえ、本稿では新十津川町在住で、他県出身者の家に嫁いだ女性への聞き取りをもとに、昭和初期から昭和50年頃の当地でのくらしを報告する。そのなかで、当時結婚や妊娠・出産に関わる習俗がどのようになされたか記述する。

2 調査地概要

(1) 調査地の地理と主要な産業

新十津川町は空知地方の中部に位置し【図】、面積は495.47km²である。町の東側には石狩川が流れ、西側には丘陵地が広がる。その間にある平地に、田畑が広がり、さらに市街地が形成されている。そのほか、町を西から東へと横切るように徳富(とつぶ)川、土寸川などが石狩川に流入している。東は石狩川を挟んで滝川市や砂川市、奈井江町と、西は山脈を境として当別町や石狩市、増毛町と接している。また、南は樺戸境川で浦白町と、北は尾白利加川に沿って雨竜町と接している。

町内はおおよそ上（旧上徳富、現大和方面）・中（旧中徳富、現中央部）・下（旧下徳富、現花月方面）・西（旧西徳富、現吉野・学園方面）の4つに分かれており、それぞれ行政的な機能は持っていないが、やや独立性があると認識されているようである（平田 1986：12-13）。

平成27（2015）年10月1日現在で2,570世帯6,831人がくらししている⁽¹⁾。産業大分類別男女別15歳以上の就業者は3,219人おり、うち農林業従事者は853人、第二次産業従事者は481人、第三次産業従事者は1,832人いる⁽²⁾。平成27年の農林業センサスによれば、町内の農業経営体数は357あり、うち353が家族経営体である。販売を目的とした農畜産物の作付状況は、水稲が307経

営体あり、作付面積は3,740haである。そのほか、蕎麦を85、大豆を43、小麦を36の経営体が作付けしており、作付面積は蕎麦が363ha、大豆と小麦がそれぞれ135haとなっている。町内には野菜の作付けや果樹の栽培、肉用や乳用の牛の飼養などもみられる。漁業経営体および従事者は町内になく⁽³⁾、農村としての性格が強い地域といえる。

(2) 十津川出身者の結婚と習俗

『町史』には「十津川出身者の混血」という項目が設けられている。それによると、明治23（1890）年に奈良県の十津川村から移住してきた夫婦のうち47.1%が母村の部落内出身者同士で結婚し、数部落のまとまりである区内出身者同士で32.2%が、十津川村内出身者同士で14.7%が結婚している（小林編 1966：229）。つまり、移住前の十津川郷の人々のほとんどが村内出身者同士で結婚しており、他府県出身者との結婚は希な例であったといえる。しかしながら移住後は世代が下るにつれ、十津川出身者の子どもや孫らと、他府県出身者との結婚が増加したことが明らかになっている⁽⁴⁾。この理由として、十津川出身者の離脱による人口減少、他府県からの移住者の増加による出身別人口の変化が起こったことが挙げられている（小林編 1966：233）。

新十津川での結婚に関する習俗については、『町史』に明治30（1897）年頃から昭和40（1965）年頃までの事例が記述されている。最初期に入植した人々の母村である十津川から持ち込まれた「ヨバイ」や「酒つり」のほかは、出身地は関係なく、新十津川での年代毎の特徴が記されている。そのため、他地域の出身の家の者同士で結婚した際に習俗がどのように変化したのか、あるいはしなかったかが判然としない。

本報告では、新十津川町で生まれ育ち、十津川出身者の家の男性と結婚した、富山県出身者の家の女性（A氏）を聞き取り調査の対象とした。聞き取りにあたっては、基本的にA氏が自身の幼少期から今日に至るまでの生活を振り返り、自由に語ってもらった。その際、結婚や出産にまつわる習俗（結納や食事、腹帯を巻く時期や胞衣の処理など）については、筆者が適宜質問した。なお、聞き取りは平成28年度から29年度にかけて計4回4日間実施した。

3 昭和3年生まれ女性のくらし

(1) 結婚までの生活（昭和3～25年）

①実家での生活

A氏は、昭和3（1928）年に新十津川で5人兄弟の次女として生まれた。実家は明治29（1896）年に富山か

ら中徳富へと移住した農家である。両親とも新十津川で生まれ育ち、父だけでなく母も富山県から移住した家の出身である。小学校に上がる頃には、春から秋にかけて実家の農作業の手伝いをしてきた。小学校卒業後には農作業がない冬期間（およそ11月～3月頃）に、裁縫所に通った。

実家では米のほか、自家用の畑で野菜の作付けしていた。実家周辺には、戦時中に札沼線⁽⁵⁾を利用し、小樽から魚を運んでくる中年の女性がいた。その女性はガンガンと呼ばれる金属製の缶の中に魚を入れ、新十津川まで運んできた。実家ではその女性を「小樽のおばさん」と呼んでおり、実家で作った米と小樽のおばさんの運んできた魚とを交換した。ガンガンの中身がどれほどの量だったかは判然としないが、「すごく重そう」な様子だった。

この頃入浴は一週間に3回程度だった。当時風呂ほどの家にもあったように記憶しているが、水をくむのも、湯を沸かすのも大変だったためか、実家では風呂を沸かした時に向こう三軒両隣に声をかけ、風呂に誘ったこともあった。同様に、他家から呼ばれ風呂に入りに行くこともあった。皆が集まり賑やかになり、楽しかった。新十津川では、銭湯が橋本町に1軒あり、戦後には「たがみ」と呼ばれた銭湯が1軒できた⁽⁶⁾。

また、A氏が結婚する数年前から、養蜂の親方とその弟子6～7人が新十津川に来ていた⁽⁷⁾。実家はその人たち全員が宿泊できるほど広い家であったことから、彼らがA氏の母の許可を得て身を寄せたこともあった⁽⁸⁾。

②裁縫技術の習得と青年団での活動

A氏は実家近くの尋常小学校に6年間通った後、同じく新十津川の高等科へと進学した。当時、小学校卒業後は補習科か高等科、中学校に進学する人が多かった。高等科は、上・中・下徳富と奥徳富吉野地区にあり、家が遠方の人は寄宿舎に入った。

高等科では専門の先生に和裁を習い、着物を仕立てられるようになった。和裁は滝川の個人宅でも習い、そのほか新十津川の個人宅でミシンを借りながら、洋裁も習った。個人宅での和裁は、系統立てて習うというより、生徒の親の希望に沿って習った。布の裁ち方やへら付け、着物の仕立て方などを教わった。月謝のほかに、練習用の布は生徒が親に頼んで用意した。初心者が新品の反物を使うことはなく、何度か着た着物を解き、のりをつけた布を利用していった。袷や単衣を縫えるようになれば、もう通う必要はなかった。それでも皆と話しながら作業するのが楽しく、A氏やその友人は袷や単衣などを縫えるようになってからも通っていた。

高等科の卒業後は、実家が属している区の青年団に誘

われて加入した。区は新十津川の一番北の地域を1区とし、23区まであった。当時は高等科を卒業したら、団員に誘われて加入するものだった。農家の人は皆入ったが、勤め人や女性（滝川の女学校に通う人など）では加入しない人もいた。団員は長子に限らず、次子以降も入れたこともあり、各区に何十人もいた。月に1回程度、定期的に集まっており、お盆前には盆踊りや太鼓の練習をした。運動会は特に盛り上がり、町内の青年団を4つに分け、各区連合で対抗戦をした。運動会の半月ほど前から家の手伝いの後、夕方から集まって練習をした。リレーやムカデ競走、俵支えや行軍のほか、銃と背囊、軍靴を履く競技があり、これは5人一組で行っていた。女子も走り高跳びなどに参加していた。運動会は小学校のグラウンドを使用していた。演芸会もあり、これも8つの支部がそれぞれ3つか4つほどのよりすぐりの芸を出し、とても盛り上がった。敬老会のイベントも青年団が各区単位でおこなっていた。

男性は青年団に25歳くらいまで加入しており、兵役が終わって帰ってきてから加入する人もいた。女性は結婚を機にやめた。その当時の新十津川の女性の多くが22、3歳で結婚するもので、25歳だと遅く、あまりそのような人はいなかった。A氏の母は19歳で結婚したが、A氏が結婚する頃はその年齢で結婚する人はいなかった。青年団で知り合い、恋愛関係になって結婚した人もいた。

(2) 結婚と出産（昭和25～30年頃）

①結婚相手の選択と結婚式

A氏は昭和25（1950）年に結婚した。夫は大正14（1925）年生まれで、新十津川で生まれ育った。A氏と夫それぞれの祖父同士や、A氏の祖父の弟が夫の祖父と親しかったことがきっかけで、昭和25年4月の3日か4日に縁談が持ち上がり、同月21日に結婚した。A氏は「本当に結婚しても良いか」と親に聞かれたが、夫とは顔見知りであったこともあり、承諾した。A氏の実家は富山県出身者の家で、夫の実家は明治22（1889）年に奈良県の十津川郷から移住した者の家であった。しかし、結婚するにあたり、その点が問題にされることはなかった。夫の母の実家が愛媛県から移住した者の家であったほか、夫の祖父からは「十津川人同士では血が濃くなる（ので他県出身者がよいだろう：筆者補足）」という意見もあった。なお、A氏の兄は南部出身者の家の女性と、すぐ下の妹は富山県出身者の家の男性と結婚し、一番下の妹は止別（現在の北海道斜里郡小清水町）出身の養蜂業を営む男性と結婚している⁽⁹⁾。一番下の妹を除けば、兄も妹も結婚相手は新十津川で生まれ育っている。

仲人は夫の両親の仲人を務めた人と同じ人で、A氏の祖父の弟であった。昔隣の家に住んでおり、親しくつき

あった。仲人には2種類あり、結婚の話がまとまった後に依頼される「タノマレ（頼まれ）」の仲人と、結婚相手を探して結びつけてくれる仲人とがいた。後者は結婚の話をもとめるため、両家に足繁く通う必要があった。仲人は夫婦一組が務めるが、仲人の男性が妻と死別している場合には、知り合いの既婚女性に妻の代役を依頼することもあった。

昭和25年当時、結納金は3万円といわれていた。夫は9人兄弟の長子だったため、A氏はそれよりいくらか少ない額をもらった。そのかわり、当時嫁入り道具の定番だった足踏みミシンやたらいはすでに婚家にあるため、持ってこなくていいといわれた。

またこの頃、自宅で式と披露宴を行うのが一般的だった。当日の衣装などの支度は、貸衣装屋から振袖を借り、髪結いに頼んで準備した。A氏以前に結婚した女性たちの頃は、貸衣装屋が貸し出す着物は留袖が一般的だった。

A氏の実家ではA氏の親戚や隣近所のほか友人などを招き、宴を催した。そこに夫やその親戚、仲人らが迎えに来て婚家（夫の実家）へと向かった。これを「デタチ（出立ち）」といった。実家から婚家への移動には、農協から借りたトラックを利用した。冬には馬橇で移動する人もいた⁽¹⁰⁾。

式には夫の親戚や隣近所、A氏とともにA氏の実家から来た親戚のほか、本州にいる人も集まり、全員で30～40人程になった⁽¹¹⁾。料理は、新十津川で魚屋と雑貨屋を兼ねたような店を営んでいた家の老年の男性が準備した。当時この辺りでの結婚式などハレの日の食事は彼が担当しており、家の人の希望を聞き、献立を決めた。

②妊娠と出産

新十津川では、免許を持った産婆がいない頃には、近所に住む、立ち会いに慣れた女性を取り上げていたほか、自力で出産した人もいた。たとえば、A氏の実家の隣に住んでいた明治生まれの女性は、自力で出産した。度胸のある人で、産気づいたら雪をかいて納屋に行き、たらいなどを準備して自力で取り上げたという。

A氏は夫とのあいだに3人の子どもがいる。いずれも、婚家の近所に住む免許をもった産婆に依頼し、子どもを取り上げてもらった。妊娠したことに気づいたら、産婆に連絡して診察してもらった。長子が産まれた昭和26年当時には、聴診や触診で子どもの様子をみてもらった。

妊娠5ヶ月目の戌の日には、姑や実母に聞き、腹帯を巻いた。3番目の子どもを妊娠した時には、7、8ヶ月目で逆子になったため、半月毎に産婆にみてもらった。産婆が腹部を触り子どもを動かす、正しい位置に戻した。

出産は産院ではなく、婚家の普段利用している寝室で行った。畳に布団を敷き、仰向けで出産した。子どもが

生まれて30分程度で後産もでてきたが、その処理は産婆がしてくれた。産後は、母乳の出がよくなるからと、お餅や団子などを姑に用意してもらった。

子どもが生まれてから数日は、産婆が様子をみてくれたが、姑も子どもをお風呂に入れるなど、世話をしてくれた。床上げは21日といわれているが、子どもたちが3人とも8月や9月といった農繁期に産まれたため、10～15日間は休ませてもらい、その後は働いた。水田や畑の草取りで忙しく、人手が必要だった。子どもの名前は夫が決めた⁽¹²⁾。

産祝いには産着などを貰った。21日の床上げの日にはお産返しといって、産祝いのお返しをした⁽¹³⁾。おむつは布で、A氏が縫った。木綿のふとんを解いたもので、二重にしており、厚みがあったので、洗うのも大変だった。裕福な家庭ではさらしの木綿を二重にしていた。それ以外の家庭では、古い布団を使ったり、古い浴衣をほどこいたりした。汚れたおしめは、夏は家の敷地にある用水路で、冬にはお風呂にたらいを持って行き、手洗した。

(3) 結婚後の生活と地域社会との関わり（昭和25～50年頃）

①婚家での生活

結婚当時、婚家には75歳になる夫の祖父と、舅・姑夫婦、夫の兄弟6人との計11人での生活だった。A氏は夫や舅とともに農作業に従事し、姑が子育てや家事を担った。舅は農協の組合長を務めていたこともあり、外での仕事も多かった。夫は農閑期には「デメン（出面・日雇い）」に出た。農協でひと月精米を手伝ったり、畑に客土したり、飼っている馬に橇をつなぎ、山で伐り出された木を積んで木工所に運んだりした。いずれも近隣で、日帰りの仕事だった。ただし、山から材木を運搬する仕事は、朝4時に家を出て夜7時に帰ってくる大変な仕事だった。木を伐る人は、山に泊まり込んでいた。A氏や姑は家の納屋で依編みや縄ないをした。1日に何十枚も編むため忙しく、寒さを嘆く暇も無かった。

昭和25年頃ほどの家にもたいい馬が1戸に1頭はいた⁽¹⁴⁾。婚家では馬小屋に牝馬2頭を飼っていた。田畑の耕作だけでなく、冬は橇をつけ、砂利の運搬をさせた。川から砂利を運び、冬期間は地区の住民たちで通りやすくするため、道にそれを撒いた。畑は、馬の餌をつくるために必要だった。馬の餌は燕麦と藁を混ぜたもので、藁は3cmくらいに切って与えた。婚家では春先に種馬を招き、仔馬をとったこともあった。種馬は町に1、2頭おり、主に畜産組合に加入している人たちでお金を出し合って買った。牝馬を飼っている家では、仔馬をとるため、日を決め種馬にきてもらった。種馬の足音は飼って

いる馬に比べ大きく力強かったことが印象的だった。馬は滝川に年に数回市が立ったため、そこに出荷してお金にしたこともあった。馬は馬喰が売り買いしていた。

婚家では雌の豚も飼っていた⁽¹⁵⁾。町内に雄豚を飼っている家が2軒あり、そこに自家の豚をリヤカーなどに乗せてつれていき、交配させて子豚をとり、売って小遣い稼ぎをした。飼っている豚は年末に屠殺し、納屋に吊るして保存し、正月には玉ねぎと豚肉とで肉鍋にした。これは正月だけのごちそうだった。

正月の食事は一人ひとりにお膳を用意した。嫁いだ頃は正月には必ず和服を着ていた。仕立てたのは家の女性で、お盆の浴衣も同様に家の女性が仕立てた。黒豆のほか、かずのこや大根の酢の物、お雑煮などを出した。お雑煮は角餅と里芋を入れた、醤油のすまし汁のものである。なれずしや、ニシンののった「ニワカズシ」なども用意した。そのほか、夫の祖父が「年取りの晩」(大晦日)に白ご飯に小豆をまぜたものを炊いていた。しかし、これが家族に人気が無いことから、A氏が嫁いでしばらくした頃に夫の祖父はこれを作らなくなった。A氏の実家では、家の中の一番柱と呼ばれる柱の前に、お重に詰めた煮豆を置いていたが、その理由はわからない。

そのほか鶏も飼っており、卵は産みたてを食べていた。鶏を飼っている家では、隠居した年寄りが小遣い稼ぎに鶏の世話をし、卵を売っていた。

②農協婦人部への加入と活動

昭和36年の新十津川の農協婦人部設立と同時に、A氏はこれに加入した。婦人部では町の女性たちのために、結婚式の衣装の貸し出しも行った。当時は貸衣装屋が多くなく、また借りるのにお金がかかったことから、婦人部で何着か購入し、少額で貸し出した。当時は女性用の着物ばかりで、男物はなかった。婦人部では後年、喪服も用意した。しかし、結婚の際に新婦用の喪服を新調するのが一般的だったため、それほど利用されなかった。

農協の総会があるときには800人ほど集まったが、その人たちの昼食を作って代金を受け取り、それを婦人部の活動資金に充てたこともあった。作る数が多いため、泊まり込み、朝に作業をした。婦人部の18支部の支部長全員で材料などを用意した。作ったのはちらし寿司で、5升ずつをハンギリにいれ、混ぜて作った。

婦人部の設立後、婦人部と農協の役員とで毎年旅行した。東北の三大祭りなど、さまざま場所に行った。A氏にとってこれが一年の楽しみであり、また夫が農協の役員をしているときには一緒に出かけることもできた。元々農協の婦人部には夫の祖父のすすめで加入したこともあり、また年に1回のことでもあったので、家族も快く送り出してくれた。

おわりに

本稿では、昭和初期に新十津川で生まれ、同地で結婚、出産を経たある女性のくらしについて記述してきた。A氏は結婚するまで、学校に通いつつ、実家の農作業を手伝い、裁縫所にも通った。農作業や裁縫は、結婚後婚家ですぐに必要とされた技術でもあった。A氏にとって、結婚前の生活は、結婚後に必要な技術を身につける期間であり、その一方で青年団に加入し、同年代の人々と交流を深めた時期でもあった。青年団での活動について、A氏も夫も詳細に記憶しており、それぞれにとって特別な経験であったようである。

結婚相手の選定については、昭和20年代には青年団などで知り合い、交際し結婚に至った人々もいた。A夫妻は、両者の親族のつきあいから縁談が調えられたが、A氏については両親から意思の確認があり、本人の意向も一定程度重視された。お互い富山県と奈良県の十津川という異なる地域からの移住者の家の出身であるが、この点は問題にされなかった。むしろ特に夫側の親族の意見により、積極的に他県の出身者の家系であるA氏が選定されたといえる。夫の親やA氏の兄妹の例をみても、他地域出身の家の者同士の結婚が避けられた様子はみられない。結婚に際し、何が最も重視される傾向があったか、今後調査を進める中で明らかにしたい。

結婚後、妊娠中には腹帯を巻く時期など、実母や姑の両者にわからないことを尋ねた。後産の処理などは産婆に任されており、墓地に埋めるなどの習俗は聞かれなかった。昭和20年代後半から昭和30年代前半には名付けの際に神棚に紙を貼ることや、お食い初めなどはしなかったが、近年行うようになっていくという変化がみられた。また、正月の食事について、これまで行ってきたことをそのまま踏襲されるのではなく、家族の好みも反映されて変化している。母村から持ち込んだと考えられる習俗がどのように変化したかを考える上で、このような事例も収集する必要があるだろう。

農協の婦人部へ加入してからは、新十津川町内の女性たちのつながりも生まれ、結婚式の衣装を貸し出したり、総会の手伝いをしたりと新たな役割もできた。A氏によれば当時農協の婦人部の他に女性同士での集まりとしては地区の婦人会があり、それらが他の家の女性たちや地域と関わりを作り出す場でもあったといえる。

今回の調査では、主として他地域出身の家の男性と結婚したA氏の事例を中心に考察を行った。今後はA氏と同世代で、同一の地域出身者の家の人と結婚した女性も対象として聞き取り調査を行い、結婚や出産に関わる事象が新十津川の女性に共通することか、そうでないかを確認する必要がある。また、今後聞き取りを進める中で、

結婚後どのように婚家の習俗を伝えられ、どのように変更あるいはそのまま継承したかを詳細に調査し、調査対象とした時期以降に起こった子どもや孫など世代毎の習俗の変化や、変化をもたらした要因についても調査を進めたい。

謝辞

本調査でお話を聞かせてくださったAさんご夫妻、郷土史研究会のみなさんには大変お世話になりました。また調査を行うにあたり、新十津川町教育委員会 社会教育グループ グループ長 武田晃典氏、北海道博物館 学芸主幹 池田貴夫氏にもご協力及びご助言をいただきました。記して厚く御礼申し上げます。

註

- (1) 平成27年国勢調査より。
- (2) 平成27年国勢調査より。
- (3) 平成27年国勢調査より。
- (4) 『町史』では、十津川出身男性の配偶者の出身地を婚姻年別(明治23年から10年ごと)に整理している。明治33年から43年までの10年間をピークに、それ以降は減少している(小林編 1966 : 232-233)。
- (5) 国鉄札沼線の敷設に伴い、新十津川町内には上徳富駅・石狩橋本駅・中徳富駅・下徳富駅という4つの駅が設置された。昭和18年には当別・沼田間が営業を中止し、軍事目的のために施設が転用されたが、昭和28年に札沼線は復元された。昭和46年には自動車の普及などの影響で、新十津川駅から北側の石狩沼田駅間の路線が廃止されている。現在、町内にはJRの札沼線の駅が3つある。
- (6) 橋本町の銭湯の始まりは不明だが、昭和20年代まで営業していた。「たがみ」は正確には「芳の湯」という名の銭湯で、昭和35年に新十津川町役場の近くに開業したが、徐々に利用者が減ったことから昭和63年に営業を廃止した(新十津川町史編さん委員会編 1991 : 980-981)。
- (7) 大正10年度の「村事務報告書」中には、新十津川で養蜂が行われていた記録がある。また、平成3年頃にも、他管内および他県の養蜂専門業者が山麓地帯に蜂群を持参し、採蜜している(新十津川町史編さん委員会編 1991 : 708-709)。
- (8) A氏によれば、当時は父が亡くなっており家には兄1人のほかは女性ばかりであったが、それでも許可をしたので信頼していたのだろう、ということである。

- (9) 一番下の妹の時には、夫となった男性が申し出て、当時家長であった母親が承諾したという経緯があり、必ずしも相手の母村にこだわっていたとは限らないようである。
- (10) 昭和12年生まれの男性によれば、冬に結婚式がある場合、青年たちが雪道に穴を掘り、その上に軽く雪を被せてわからないようにし、轆をひっくり返す嫌がらせをした。その方が縁起が良い、と言われていた。
- (11) A氏は当時、結婚式で実家を出て婚家に到着後「オチツキモチ(落ち着き餅)」を食べたという話や、お酒釣りもあったと聞いている。しかし前者は行っておらず、後者は覚えがないとのことであった。
- (12) 近年は名付けの際に紙を神棚に貼るようになったが、A氏の子どもたちが生まれたときには行っていない。
- (13) お食い初めやお宮参りはしなかった。A氏のひ孫が生まれた際に、お食い初めやお宮参りを行った。孫の妻の実家が本州にあり、そちらからの意見を取り入れたためである。
- (14) 馬は開村当時より飼育されており、農耕馬として使用された。昭和23年には町内に1,818頭飼われていたが、昭和63年にはわずか21頭のみとなっている(小林編 1966 : 731-733)。
- (15) 豚は自家食用あるいは副業として飼養されており、昭和36年頃には168戸で236頭飼われていた(新十津川町史編さん委員会編 1991 : 703-704)。昭和初期には、正月用に豚肉を用意するのは一般的だったようである。平田は「豚一頭を四戸で分けるのが普通である。頭と尻っぽを取って、たて割りにして後、胴の部分で切り、前肢と後肢に分け都合四つ(原文のママ)」に分けたと記述している(平田編 1986 : 85-86)。

参考文献

- 小林宏吉編 1966. 新十津川町史. 北海道樺戸郡新十津川町役場.
- 新十津川町史編さん委員会 1991. 新十津川町百年史. 新十津川町役場.
- 竹田旦 1992. 新しい民俗誌の構想—『新十津川物語』を見て. 北海道を探る 24: 314-318.
- 平田角平編 1986. 新十津川の食 ごった煮はいかが 昭和初期にみる. 新十津川郷土史研究会.
- 宮良高弘 1998 北海道の婚姻と家族. 北の生活文庫 第4巻 北海道の家族と人の一生. pp.98-139. 北海道.

A Woman's Life in Shintotsukawa

Kaori OMAGARI

This article describes a woman's life in Kabato District Shintotsukawa Town, Hokkaido from the early Showa period until Showa 50 (circa 1926-1975).

Shintotsukawa Town (Shintotsukawa Village at that time) was created as a result of a group migration from Totsukawagou, Nara Prefecture in Meiji 22 (1889). In time, as the number of migrants from the Hokuriku and Shikoku region increased, marriages between people from Totsukawagou and their descendants, and people from other regions and their descendants, also increased. A survey focusing on whether friction occurred due to differences in the manners and customs in the family relationships, and how the manners and customs of mar-

riage and birth passed down within each family from their home village had changed.

This survey targeted a woman who was a descendant of people from Toyama Prefecture. She was born and raised in Shintotsukawa and married a descendant of people from Totsukawagou, Nara Prefecture. At the time of her marriage, relatives of her husband had a favorable view of her background from another region as a marriage partner.

Although customs regarding marriage and birth were not extensively considered, customs related to child rearing became increasingly valued as each generation passes.